

オセアニア [豪州]



1 農・畜産業の概況

豪州の農畜産業は、国内総生産（GDP）の2.1%、就業人口で2.7%と、産業全体に占める割合は必ずしも高くない（2013/14年度（7月～翌6月））。しかし、同年度の総輸出額に占める割合は12.4%となっており、輸出産業の中で重要な位置を占めている。

豪州では、国土面積（7億7000万ヘクタール）の46%に相当する3億5100万ヘクタールが農畜産業に利用されており、その大半は牛や羊の放牧地となる自然草地および採草地であり、小麦などを栽培する耕地面積は、2810万ヘクタールにすぎない（2014年6月末現在）。

豪州の農場数は、2013/14年度は12万8454戸（前年度比0.4%減）とわずかに減少し、2年度連続の減少となった。また、農業従事者数は、高齢化による離農などにより2009/10年度以降減少が続いていたが、2013/14年度は、牛肉価格や乳価の上昇などを背景に増加に転じた（表1）。

経営形態では、肉牛、羊、酪農などの専業経営のみならず穀物などの複合経営も多いことから、農業従事者全体の約8割が、何らかの形で畜産経営に携わっているとみられる。

表1 農場数などの推移

（単位：戸、千人、豪ドル）

区分／年度	09/10	10/11	11/12	12/13	13/14
農場数	134,184	135,447	135,692	128,917	128,454
農業従事者	350.9	337.3	321.0	301.7	312.8
1農場当たり農業粗所得	59,470	120,870	112,200	110,270	124,600

資料：ABS「Land Management and Farming in Australia, 2013-14」

ABARES「Agricultural Commodity Statistics 2014」

「Australian Farm Survey Results」

注1：年度は7月～翌6月。農場数、農業従事者数は各年度6月末時点。

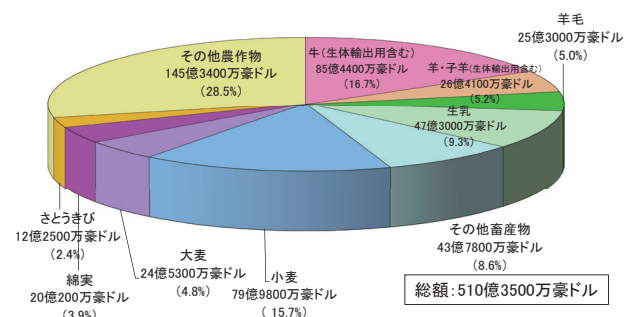
2：農場施設評価額2万2500豪ドル以上の農場。

3：2013/14年度は暫定値。

農畜産業生産額は、2000/01年度以降、おおむね増加傾向で推移し、2013/14年度は510億3500万豪ドル（同5.2%増）となった（図1）。

内訳を見ると、牛（生体輸出用を含む）が85億4400万豪ドル（同10.6%増）、羊が26億4100万豪ドル（同16.7%増）となり、米国産の代替としての豪州産牛肉に対する輸出需要の高まりや、ラム価格の上昇を反映してともに増加している。生乳は、乳製品国際価格の上昇を背景とした乳価の上昇により、47億3000万豪ドル（同28.3%増）と大幅に増加した。この結果、畜産物全体では228億2300万豪ドル（同13.5%増）となった。一方で、農作物は、綿実やさとうきびなどがおおむね減産となったことから、全体で282億1200万豪ドル（同0.6%減）となった。

図1 農畜産業生産額（2013/14年度）



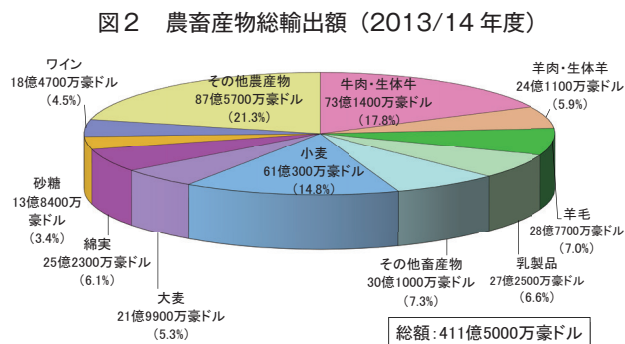
資料：ABARES「Agricultural Commodities」

注1：年度は7月～翌6月。

2：ABARESによる推計。

一方、2013/14年度の農畜産物総輸出額（FOB）は411億5000万豪ドル（同8.2%増）となり、そのうち畜産物輸出額は183億3700万豪ドル（同22.6%増）と、大幅に増加した。

内訳は、牛肉・生体牛が73億1400万豪ドル（同33.9%増）、羊肉・生体羊が24億1100万豪ドル（同37.0%増）、乳製品が27億2500万豪ドル（同22.1%増）となった（図2）。



資料：ABARES「Agricultural Commodities」
注：年度は7月～翌6月。

2 畜産の動向

(1) 酪農・乳業

豪州の酪農は、放牧を主体とする経営がほとんどであり、気候条件に恵まれ、牧草の生育が良いビクトリア（VIC）州を中心に行われてきた。しかしながら、最近では、同州でも度重なる干ばつを経て、穀物や乾草などの購入飼料の利用も多くなっている。

また、生産される生乳の約7割が加工向けであり、さらに、製造される乳製品の約6割が輸出向けという、輸出指向型の産業である。

以上のことから、生乳生産は、天候や牧草の生育状況などによって大きく変動するとともに、酪農経営は、乳製品の国際市況および為替変動の影響を受けやすいという特徴がある。

① 主要な政策

生乳の販売時に課される生産者課徴金を財源に、デーリー・オーストラリア（DA）が販売促進や研究開発、マーケット情報の提供などを一括して行っている。

② 生乳の生産動向

乳用経産牛の飼養頭数は、2008年以降、おおむね安定的に推移しており、2014年は169万頭（前年比0.1%増）となった（表2）。一方、酪農家戸数は、長期的に減少傾向にあり、2014年は6314戸（同1.3%減）となった。なお、大規模で効率的な農家への集約と

いう傾向が続いており、1戸当たり経産牛飼養頭数は、2014年には268頭（同1.5%増）となっている（図3）。

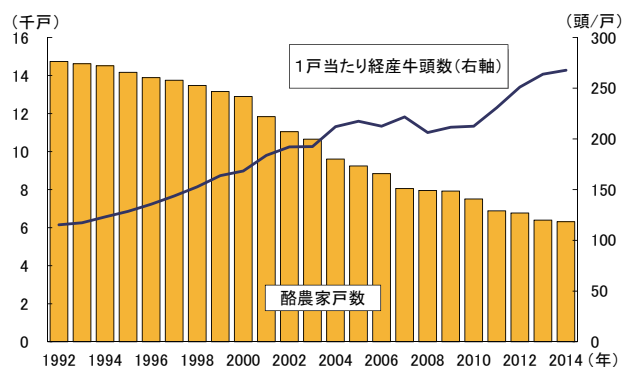
表2 乳牛飼養頭数などの推移

（単位：千頭、戸、頭）

区分／年	2010	2011	2012	2013	2014
乳牛飼養頭数	2,542	2,570	2,733	2,834	2,807
経産牛飼養頭数	1,596	1,589	1,700	1,688	1,690
酪農家戸数	7,511	6,883	6,770	6,398	6,314
1戸当たり経産牛頭数	212	231	251	264	268

資料：ABARES「Agricultural Commodity Statistics 2014」、
Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」
注：各年6月末時点。

図3 酪農家戸数と1戸当たり経産牛頭数の推移

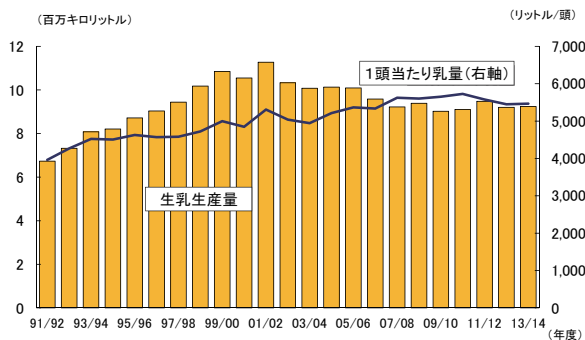


資料：Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」

生乳生産量は、1990年代から2000年代初頭までは、ガット・ウルグアイラウンド合意に伴う乳製品輸出拡大への期待などを背景に、増加傾向で推移してきた。しかしながら、2002/03年度から2009/10年度までは、干ばつなどの影響により減少傾向で推移した。その後、2011/12年度は、気候条件の好転や、かんがい用水を利用した生産地域での水利用環境の回復から増加した。2012/13年度は、乾燥気候の影響から減少したが、2013/14年度は、年度の後半にかけて気候条件が好転したため、924万キロリットル（前年度比0.4%増）と、わずかに増加した。

経産牛1頭当たり乳量については、放牧に適した系統へと改良が進められたこともあり、日本や米国などと比較してそれほど多くはない。しかし、最近では、乳牛の遺伝子研究や、補助飼料供給体制の進展により着実に増加しており、2013/14年度は、5467リットル（同0.3%増）と、わずかに増加した（図4）。

図4 生乳生産量と経産牛1頭当たり乳量の推移



資料：ABARES [Agricultural Commodity Statistics 2014]
注：年度は7月～翌6月。

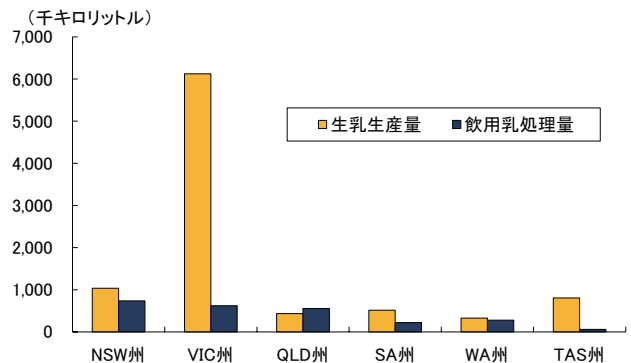
加工用に仕向けられる生乳の割合は、乳製品の輸出拡大に伴って徐々に上昇し、2004/05年度には生乳生産量の8割程度を占めた。しかし、国内の飲用乳需要が堅調に推移していることから、2013/14年度は73.4%に低下している。

生乳生産量を州別に見ると、VIC州が全体の66.3%を占め、豪州最大の酪農地域となっている。ただし、飲用乳向けの生乳処理量は、大消費地であるシドニーを擁するニューサウスウェールズ（NSW）州が最も多い（図5）。

このように、生乳生産に占める飲用向けの割合が州により大きく異なるため、乳業メーカーごとの生産者乳価

については、飲用向け割合が高い地域とそれ以外の地域とでは、大きな差が生じている。

図5 州別生乳生産量（2013/14年度）



資料：Dairy Australia [Australian Dairy Industry In Focus]
注1：年度は7月～翌6月。
注2：飲用乳処理量は州間移動を含む。

③牛乳・乳製品の需給動向

2013/14年度の主要乳製品の生産量については、年度前半の生乳生産量の減少から、最大の輸出品目である脱脂粉乳とチーズについては、脱脂粉乳は21万964トン（前年度比5.8%減）、チーズは31万1460トン（同7.9%減）と前年度を下回った。一方、全粉乳とバターについては、全粉乳は12万6322トン（同16.1%増）、バターは10万1705トン（同2.7%増）と旺盛な輸出需要に支えられ、前年度を上回る生産量となった（表3）。

表3 牛乳・乳製品生産量の推移

(単位：千キロリットル、千トン)

区分 / 年度	09/10	10/11	11/12	12/13	13/14
生乳	9,023	9,100	9,480	9,200	9,239
飲用向け	2,269	2,316	2,388	2,441	2,474
加工向け	6,754	6,784	7,092	6,759	6,765
バター	100.1	96.3	100.6	99.0	101.7
バターオイル	28.2	26.2	19.2	19.2	14.4
チーズ	349.6	338.7	346.5	338.3	311.5
脱脂粉乳	190.2	222.5	230.3	224.1	211.0
全粉乳	126.0	151.3	140.4	108.8	126.3

資料：Dairy Australia [Australian Dairy Industry In Focus]
注1：年度は7月～翌6月。
注2：生乳の単位は千キロリットル。
注3：乳製品の単位は千トン。

2013/14年度の主要乳製品の輸出量は、全体的に前年度を下回ったものの、バターについてはロシア向け輸出が、飲用乳については中国やフィリピン向け輸出が増加したことを受け、前年度を上回った。

2013/14年度の主要乳製品の生産量に占める輸出割合については、全粉乳は80.9%、脱脂粉乳は67.9%と、生産量の過半を占めている。また、バター（バターオイルを含む）、チーズについても、それぞれ40.8%、48.3%と、輸出割合はいずれも4割以上となっている（表4）。

乳製品の輸出は、日本、東南アジア、その他のアジア諸国（主に中国）向けの割合が高く、輸出額ベースで全体の75.5%と、圧倒的なシェアを占めている（図6）。特に粉乳類は、育児用粉ミルクなどの需要が多い中国および東南アジア諸国向けを中心に、脱脂粉乳、全粉乳ともに約7割はアジア地域向けに輸出されている。

表4 牛乳・乳製品輸出量の推移

（単位：千トン、千キロリットル）

区分/年度	09/10	10/11	11/12	12/13	13/14	輸出割合 (13/14)
バター	41.7	33.4	33.6	39.3	39.8	}40.8%
バターオイル	25.8	18.1	12.1	11.5	7.6	
チーズ	168.1	163.0	160.9	174.1	150.6	48.3%
脱脂粉乳	125.6	155.3	141.3	146.9	143.3	67.9%
全粉乳	116.7	125.9	116.1	103.8	102.3	80.9%
飲用乳	64.2	70.9	87.7	106.5	118.2	4.8%

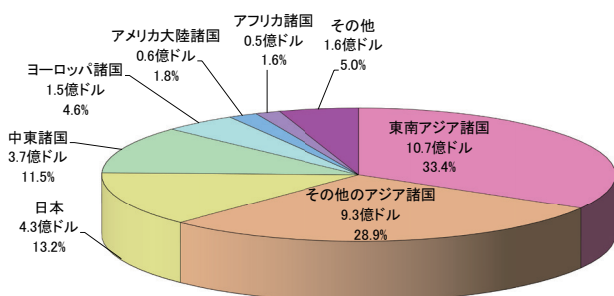
資料：Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」

注1：年度は7月～翌6月。

2：乳製品の単位は千トン。

3：飲用乳の単位は千キロリットル。

図6 地域別乳製品輸出額（2013/14年度）



資料：Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」

注：年度は7月～翌6月。

2013/14年度の主要乳製品の1人当たり消費量のうち、飲用乳は105.7リットル（前年度比1.1%減）とわずかに減少した。しかしながら、牛乳から成分調整牛乳や加工乳へと消費トレンドは移行しつつも、カフェ文化の浸透による牛乳の間接消費や、量販店における低価格牛乳の販売拡大によって、飲用乳の消費量はおおむね安定的に推移している。ヨーグルトは健康志向や簡便な朝食としての需要が高く、同7.4キログラムと前年並みとなった。チーズは同13.4キログラム（同0.7%減）と減少し、バターは同3.9キログラム（同5.4%増）と増加したものの、ともに近年は、おおむね安定的に推移している。

表5 1人当たり年間牛乳・乳製品消費量の推移

（単位：リットル、キログラム/人・年）

区分/年度	09/10	10/11	11/12	12/13	13/14
飲用乳	103.8	104.5	106.1	106.9	105.7
チーズ	13.3	13.7	13.5	13.5	13.4
バター	3.9	3.9	3.9	3.7	3.9
ヨーグルト	7.2	7.3	7.4	7.4	7.4

資料：Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」

注1：年度は7月～翌6月。

2：飲用乳の単位はリットル。

3：乳製品の単位はキログラム。

④乳価の動向

酪農・乳業は輸出指向型産業であることから、生産者乳価は、乳製品の国際市場の影響を強く受ける。2009/10年度は、世界金融危機（2008年9月）以降の経済低迷などから、前年度に引き続き下落した。2010/11年度は、乳製品の国際価格が堅調であったため上昇し、2011/12年度も比較的高い水準が続いた。2012/13年度は、乳製品の国際相場が軟調に推移したため下落に転じたが、2013/14年度は、アジア地域や中東諸国からの強い需要に伴う乳製品の国際価格の上昇により、前年度比27.4%高の1リットル当たり51.2豪セントとなった（表6）。

表6 生産者乳価の推移

（単位：豪セント/リットル）

年度	09/10	10/11	11/12	12/13	13/14
生産者乳価	37.3	43.2	42.0	40.2	51.2

資料：Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」

注：年度は7月～翌6月。

(2) 肉牛・牛肉産業

豪州の肉用牛生産は、酪農と同様、牧草（放牧）に依存しており、牛肉生産量の約7割を輸出に仕向ける輸出指向型産業である。

肉用牛は、粗放的な飼養管理が可能のため、乳牛に比べると利用可能な草地の範囲が広いことに加え、熱帯・乾燥地帯などの自然条件が厳しいところでも、熱帯品種などを選択的に導入することによって飼養が可能となる。このため、内陸部の極端な乾燥地帯を除き、ほぼ豪州全土で、多種多様な品種による生産が行われている。

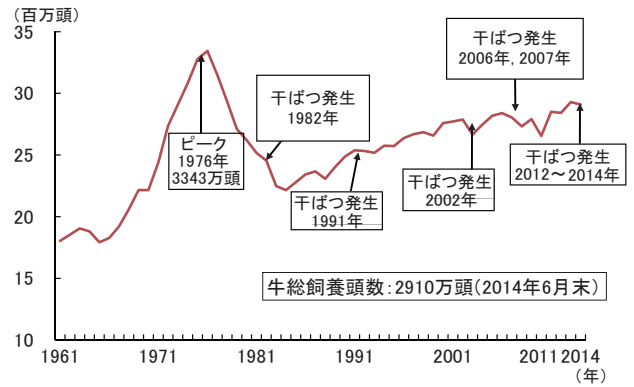
① 主要な政策

肉用牛や牛肉の需給管理を目的とした制度・政策は特になく、生産者は、国内外の市場動向を勘案しつつ経営を行っている。また、豪州家畜検疫検査局（AQIS）などの政府機関が家畜衛生政策を、豪州食肉家畜生産者事業団（MLA）などの業界団体が販売促進、研究開発、市場情報の提供などを行っているが、これらの事業財源の多くは、生体の取引（販売）時に課される生産者課徴金によるものである。

② 牛の飼養動向

豪州の牛飼養頭数（乳牛を含む）は、長期的な推移を見ると、1960年代後半から70年代半ばにかけて、世界的な牛肉需要の増大を背景に急激に増加し、1976年には過去最高の3343万頭を記録した。その後、第二次オイルショック（1979年）などによる世界的な牛肉需要の減退や肉用牛経営の悪化、大干ばつの発生（1982年）などにより、1984年には2216万頭と、ピーク時に比べ3分の2まで減少した。それ以降は、主に干ばつなど天候の影響を受けながらも緩やかな増加傾向で推移している。

図7 牛飼養頭数の長期的推移



資料：ABARES「Agricultural Commodity Statistics 2013」（2012年以前）、
「Agricultural Commodities - September Quarter 2014」（2013年）

注1：乳牛を含む。

注2：各年6月末時点。

2000年以降は、2002年および2006年から2008年にかけて大規模な干ばつが発生したが、2010年以降天候が回復し、2011年から2012年前半にかけては東部を中心に降雨に恵まれたことから、生産者は雌牛や子牛を保留し、牛群再構築が進んだ。この結果、2011年には2850万頭超の高水準となった（図7）。

2012年後半以降は東部で再び気象状況が悪化し、早期出荷が進んだことから、2014年6月末時点の牛飼養頭数は2910万頭（前年比0.6%減）となり、うち肉用牛は2630万頭（同0.6%減）となった（表7）。

表7 牛飼養頭数の短期的推移

(単位：千頭)

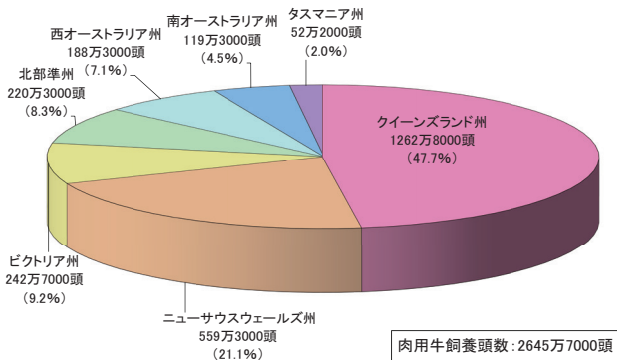
区分/年	2010	2011	2012	2013	2014
肉用牛	24,008	25,936	25,685	26,457	26,296
乳用牛	2,542	2,570	2,733	2,834	2,807
合計	26,550	28,506	28,418	29,291	29,103

資料：ABARES「Agricultural Commodity Statistics 2014」（2013年以前）、
「Agricultural Commodities - September Quarter 2015」（2014年）

注：各年6月末時点。

肉用牛の飼養頭数を州別に見ると、クィーンズランド（QLD）州（シェア47.7%）、NSW州（同21.1%）、VIC州（同9.2%）の東部3州で全体の8割近くを占め、肉用牛供給の根幹を成している（図8）。

図8 州別肉用牛飼養頭数（2013年6月末時点）



資料：ABARES「Agricultural Commodity Statistics 2014」

③牛肉の需給動向

ア 生産動向

牛と畜頭数（子牛を含む）は、2006/07～2007/08年度にかけて大干ばつによって増加した後、天候の回復による牛群再構築から減少傾向にあった。しかしながら、2012年後半以降のQLD州を中心とした干ばつの進行に伴い増加傾向で推移し、2013/14年度は947万3000頭（前年度比12.0%増）と、かなり大きく増加した。

一方、平均枝肉重量は、2010年以降、降雨に恵まれて良好な放牧環境が続いたことで増加傾向で推移し、2011/12年度は過去最高となった。その後、2012/13年度以降は、干ばつに伴い減少し、2013/14年度は、276.4キログラム（同2.1%減）と、わずかに減少した。

以上から、2013/14年度の牛肉生産量（子牛肉を含む。枝肉重量ベース）は、246万4000トン（同9.8%増）となった。

表8 牛肉需給の推移

（単位：千頭、千トン、キログラム）

区分/年度	09/10	10/11	11/12	12/13	13/14
と畜頭数	8,364	8,097	7,873	8,457	9,473
生産量	2,109	2,133	2,115	2,245	2,464
平均枝肉重量	275.7	283.5	288.0	282.4	276.4
輸出量	899	937	948	1,014	1,184
1人当たり消費量	34.6	33.9	31.9	33.2	32.2

資料：MLA「Statistical Review」

注1：年度は7月～翌6月。

2：と畜頭数の単位は千頭。

3：生産量と輸出量の単位は千トン。

4：平均枝肉重量と1人当たり消費量の単位はキログラム。

5：生産量および1人当たり消費量は枝肉重量ベース、輸出量は船積重量ベース。

6：と畜頭数には子牛を含む。

7：生産量、輸出量および1人当たり消費量は子牛肉を含む。

8：平均枝肉重量は成牛のみ。

イ 輸出動向

牛肉輸出量は、近年の牛肉生産量の増加傾向を受けて、2009/10年度以降、増加傾向で推移している。2013/14年度の牛肉輸出量（船積重量ベース）は、干ばつに伴う牛肉生産量の増加を受けて、過去最高の118万4400トン（前年度比16.8%増）となった。主要輸出先別に見ると、最大の輸出先である日本向けは、米国との競合などから27万9700トン（同6.4%減）と減少した。一方、米国向けは、米国国内の牛肉生産の減少を受けて、26万5900トン（同28.7%増）と、大幅に増加した。韓国向けは、堅調な需要から、15万5700トン（同13.0%増）と増加するとともに、中国向けも急速な需要の拡大から、16万400トン（73.8%増）と大幅に増加した（表9）。

表9 牛肉の国別輸出量の推移

（単位：千トン）

国名/年度	09/10	10/11	11/12	12/13	13/14	輸出シェア (13/14)
日本	349.9	351.4	325.8	298.8	279.7	23.6%
米国	210.5	160.0	205.2	206.6	265.9	22.5%
韓国	123.9	139.2	122.8	137.7	155.7	13.1%
中国	4.3	7.2	7.7	92.3	160.4	13.5%
その他	214.8	286.7	294.4	278.5	322.7	27.2%
合計	899.9	937.3	948.3	1,013.9	1,184.4	100.0%

資料：豪州農漁林業省（DAFF）

注1：年度は7月～翌6月。

2：船積重量ベース。

ウ 消費

1人当たり食肉消費量を見ると、他畜種と比べて安価であることや消費者の健康志向を受けて、近年、鶏肉が増加し、2000年代後半に牛肉と逆転した。

2013/14年度は、鶏肉が44.7キログラム（前年度比1.4%増）と増加傾向が続いている一方、牛肉は32.2キログラム（同3.0%減）と、2年ぶりに減少した（表10）。

表10 1人当たり年間食肉消費量の推移

(単位：キログラム)

区分/年度	09/10	10/11	11/12	12/13	13/14
牛肉	34.6	33.9	31.9	33.2	32.2
マトン	1.0	0.5	0.1	0.3	0.4
ラム	10.2	9.0	9.3	9.6	9.3
豚肉	26.2	24.6	25.4	26.0	25.7
鶏肉	38.0	44.3	44.0	44.1	44.7
合計	110.0	112.3	110.7	113.2	112.3

資料：MLA [Statistical Review]

注1：年度は7月～翌6月。

2：牛肉には子牛肉を含む。

3：マトン、ラムはともに羊肉であるが、MLAによると、ラムは永久歯が生える前の羊の肉を表し、マトンはその他の羊の肉を表す。通常、ラムは生後1年未満の羊の肉に相当し、マトンは生後2年以上の羊の肉に相当する。

④ 生体牛輸出

生体牛輸出は、インドネシアなど東南アジア諸国向けの肥育もと牛が中心となっている。最大の輸出先であるインドネシア向けについては、経済成長に伴い増加傾向となっていたが、同国が2010年以降、国内生産振興のため、輸入制限的な政策を開始したことから、2012/13年度の生体牛輸出頭数は、63万4300頭（前年度比7.2%減）とかなりの程度減少した。しかしながら、2013/14年度は、同国の輸入制限の緩和により、113万3500頭（同78.7%増）と大幅に増加した。

その他の国では、ベトナム、イスラエル、中国向けが、いずれも大幅に増加している（表11）。

表11 生体牛の国別輸出頭数の推移

(単位：千頭)

国名/年度	09/10	10/11	11/12	12/13	13/14	輸出シェア (13/14)
インドネシア	718.1	457.4	376.1	271.3	624.7	55.1%
イスラエル	36.4	50.4	60.5	63.8	108.1	9.5%
中国	50.5	48.9	58.9	59.2	94.2	8.3%
マレーシア	4.6	19.7	19.3	36.9	55.4	4.9%
フィリピン	14.4	15.6	23.8	35.3	19.7	1.7%
ロシア	9.4	10.5	36.9	36.3	50.1	4.4%
トルコ	0.2	100.9	37.4	35.6	0.0	0.0%
ベトナム	0.0	0.0	0.9	15.9	131.4	11.6%
エジプト	33.4	23.1	32.1	15.3	8.0	0.7%
日本	15.5	12.4	14.3	10.4	11.6	1.0%
その他	75.1	66.0	23.1	54.2	30.3	2.7%
合計	957.5	805.0	683.3	634.3	1,133.5	

資料：MLA [Australian livestock export industry statistical review]

注1：年度は7月～翌6月。

2：乳牛を含む。

⑤ 肉用牛価格の動向

2013年の肉用牛の家畜市場加重平均価格は、1キログラム当たり287.1豪セント（前年比9.9%安）と、2年連続で下落した（表12）。これは、2012年後半以降、干ばつの進行に伴い、早期出荷が増加し、肥育農家の導入意欲が減退したことが影響しているためとみられる。

表12 肉牛価格の推移（枝肉換算）

(単位：豪セント/キログラム)

区分/年	2009	2010	2011	2012	2013
若齢牛	319.3	349.2	385.8	368.0	327.9
肥育牛	299.4	321.5	343.3	333.3	318.1
経産牛	252.8	272.2	293.4	277.4	247.4
加重平均	281.5	304.9	333.9	318.7	287.1

資料：ABARES [Agricultural Commodity Statistics 2014]

注1：いずれも、主要家畜市場の価格。

2：肥育牛は生体重500～600kg、経産牛は同400～520kg。